

書評

「医療と教育の刷新を求めて」

聖路加看護大学学長 日野原 重 明

立川病院長・慶応義塾大学名誉教授 相 澤 豊 三

西洋医学を根幹として発達してきたわが国における近代医学の歩みは華々しい成果を挙げ、とくに伝染病のコントロールと乳幼児の対策が示した実績はまことに燦然たるものがあったといわざるを得ない。ためにわが国民の平均寿命は男女ともに75歳前後に達するに至った。しかしながら科学は万能かと描いた夢には思わざる陥し穴が待っていたことに近年気づきはじめてきた。今や生命の延長に伴う成人病の対策に手を焼くことになったのであるからまことに皮肉な現象ともいえよう。

およそ、疾病との闘いは治療および予防のいずれかが可能となればそれでよいのである。成人病の多くが慢性病であり、その治療が容易でない段階にある現在、一方では予防不能のものを可能とすべく努力が重ねられてゆくのは当然のことであり、そうした病気になるように健康状態を保持増進することが要求されるに至り、それだけに医療の内容と規模は大きく膨れあがり、かつ著しく複雑化してきた。

これまで医師と患者2人だけで向かいあった世界に看護を始めとする薬剤・栄養・検査等の諸部門に属する沢山の人が入り込んできて、しかも外部との繋がりが次第に強くなってきているのが今の医療の特徴だとさええるようになってきたのである。このような条件の中ではもし放っておけば、医師と患者との人間関係の稀薄化は遺憾ながら必然的に進んでゆかざるを得なくなるであろう。

かくて現在の医療は、技術革新のテンポの速さに追いつまられ、権利意識の向上と医療に対する患者の不満が増し、あまつさえ医師の定数増加を考えると、今後の医療集団は大きな変革を迎えざるを得なくなっているのである。

この時に当り、大学の研究室から臨床病院、そして滞米生活における貴重な体験をもとに、わが国における臨床医学前進への新しいシステム化に熱意を燃し続けてこられた畏友日野原重明博士が、掲題の素晴らしい書を上梓されたことの意義は重大であり、まさに時宜を得たりというべきである。

著者のまえがきにもあるように、この書は過去15年間に、医学・看護やその教育、医療従事者の役割さらに日本の医療システムについて、また文明について現状を分析し、将来を展望し、変革されなければならない幾多の問題点について講演あるいは寄稿されたもののまとめである。

述ぶところ広範囲に亘っているが、欧米の文明をひたすら追いかけてここまできた日本の医療並びに教育は今になって省みると、“跡みれば、さて曲りけり雪の道”とでもいうか、どうやらここらで、そのシステムの大転換を行なうべきではないかというのが、何れの項の中にも流れている本筋であると思う。まずそれには今まさに思い切ってその変革を加えつつある米国の現状を参考にすべきであるとし、それについての具体的解説は懇切丁寧である。

医療のシステムを大きく分類すれば、一次医療、二次医療、三次医療とされるが、このうち問題は一次医療にあって、これは問題を持つ患者がまず最初に接する医療 first line medicine のことをいうのであるが、これに携わる primary physician は米国では僅か3年間の卒後教育で全疾患の80%は対処できるようにトレーニングが実施されていることに注目したい。

近代医学の特色はますます分科され、専門化することにある。研究領域が細分され、深さが増すことは、科学としての医学の進歩にいうまでもなく必要であるが、医学は専門的であるとともに総合的でなければならない。医学が統合された姿において前進するためには、大学や病院のスタッフが各々の経験とタレントを生かし、幾つかの医学研究機関は一緒になって医学を研究し、また医療を高める方向に努力しなければならない。今までの日本人の最も不得意とした他科の人や、閥外の人たちと一緒に働く協力体制を若い時代から作りあげるべく努力することが必要であるとの力説はもっともなことと思われる。

医師・看護婦以外の医療従事者すなわち、従来 para medical と呼ばれている者は、今日英米において health professional と称せられている。今後看護婦や health professional といわれる職種の意味と役割をよく考えてゆかねばならないことをそれは示すものであり、医療の何もかも医師に縋てをまかせようという

時代はすでに過ぎてしまっているのである。

健康の自己管理と教育的アプローチにしても、医師によってただ与えられる医療ではなく、患者自身学びとれる医療を提供したいものである。こうなると医の倫理は医師だけに要求されるものではなく、医師と患者または家族との間にも形成されるべき人間関係であり、その間に流

れる humanity とそ医の倫理と呼ぶべきである。そして開業医と病院と病院医または専門医と大学の教職の間にも、患者や家族をその中に介在してのモラルがなければいけないというのである。

……以上は著者の強調する主たる点を引用した次第であるが、他にも読者の共感を呼ぶ優れた考え方が数多く盛られていることとて、本書

が、医療と教育の刷新を求めて現状の反省ならびに今後の指導の上で大きく寄与すること蓋し疑いの余地がない。改めてこのような名著をものにされた著者の深い経験と卓越した識見に敬意を表し、今後のご健闘を祈るものである。

A 5 頁300 図15 ¥1600 〒200 1979